

「3年次教育実習のあり方」 に関する報告書

熊本大学教育学部教育実習委員会

平成28(2016)年3月

「3年次教育実習のあり方」に関する報告書

目 次

第1部 実習生の教師に対する意識に関する調査報告 1

1. 実習生の教師に対する意識に関する追跡調査（第1報）

－平成27年度3年次実習事前・事後調査の結果（Ⅰ）－

中山玄三・藤中隆久

2. 実習充実度の違いによる教師に対する意識の差

－平成27年度3年次実習事前・事後調査の結果（Ⅱ）－

中山玄三・藤中隆久

第2部 「3年次教育実習のあり方」に関する協議報告 15

1. 「3年次実習のあり方」についての協議

－平成27年度3年次実習事前・事後調査結果を踏まえて－

中山玄三・藤中隆久・山崎浩隆

2. 「3年次実習のあり方」について学科からの意見等

神野雄二・竹中伸夫・村田貴広・山崎浩隆・赤木恭子

坂本将基・引地力男・中迫由実・村里泰昭・藤原志帆

松田芳子・今井伸和・高崎文子・山城千秋・中山玄三

3. 「3年次実習のあり方」について附属学校園からの意見等

水上洋平・田代博士・西川由里子・浅尾理恵子

4. 3年次実習の在り方－教員養成大学としての役割－

定政節夫

第1部

実習生の教師に対する意識に関する 調査報告

実習生の教師に対する意識に関する追跡調査（第1報）

—平成27年度3年次実習事前・事後調査の結果（I）—

教育実習委員長 中山玄三
共同研究者 藤中隆久

I 目的

- (1) 3年次実習前（平成27年6月）から4年次事後指導（平成28年6月）までの期間に、同一質問項目を用いて、縦断的な追跡調査を行うことで、実習生の教師に対する意識の変化を把握し、その実態を明らかにする。また、実習生が感じる実習充実度の程度の違いによって、教師に対する意識の変化に違いが見られるかどうかを明らかにする。
- (2) 調査結果に基づき、教育実習の内容・方法の改善・充実に向けた提言を、各学科および附属学校園で取り纏め、実習委員会報告書を作成する（平成28年11月）。

II 方法

- (1) 対象：平成27年度3年次実習参加者全員
- (2) 調査の時期と調査の内容

	調査の時期		調査の内容
①	平成27年6月	3年次オリエンテーション	教師に対する意識
②	平成27年9月	3年次附属実習終了後	教師に対する意識・実習充実度
③	平成28年4月	4年次オリエンテーション	教師に対する意識
④	平成28年5月	4年次附属実習終了後	教師に対する意識・実習充実度
⑤	平成28年6月	4年次協力校実習終了後・事後指導	教師に対する意識・実習充実度

- (3) 調査質問紙の項目の内容構成

	肯定項目	逆転項目
質問紙A：教師に対する意識（19項目）	10項目 ①②④⑧⑪⑫⑬⑮⑰⑱	9項目 ③⑤⑥⑦⑨⑩⑭⑯⑲
質問紙B：実習充実度（15項目）	10項目 ①②③⑥⑧⑨⑩⑫⑭⑮	5項目 ④⑤⑦⑪⑬

- (4) 今回の調査

平成27年度3年次実習の事前オリエンテーション後の6月に、「教師に対する意識」（信頼性係数：Cronbach $\alpha=0.88$ ）の調査を実施した。引き続き、3年次附属学校実習終了後の9月に、「教師に対する意識」（ $\alpha=0.89$ ）と「実習充実度」（ $\alpha=0.86$ ）の調査を実施した。対象は、3年次附属学校実習に参加した教育学部3年次生全員223名（欠損値を除く）であった。

III 結果

調査データの分析に当たっては、まず、逆転項目について、尺度得点を「5→1, 4→2, 3→3, 2→4, 1→5」の規則に従って変換することで、数値が大きくなるほど肯定（否定の否定）、つまり教師に対する意識および実習実度の意識が高いことを意味するように補正することにした。次に、「教師に対する意識」と「実習充実度」について、それぞれの意識の構造化を図るために、教育実習後のデータを用いて、主因子法（Kaiserの正規化を伴うプロマックス回転法）による探索的因子分析を行った。そうして、教育実習の前・後で意識に有意な差があるかどうかを確かめるために、項目全体・各項目および因子全体・各因子の尺度得点を用いて、反復測定による1要因の分散分析を行った。また、因子得点の平均値の間に有意な差があるかどうかを確かめるために、対応のある1要因の分散分析を行った。「教師に対する意識」と「実習充実度」の調査結果は、それぞれ以下のとおりである。

Ⅲ-1 教師に対する意識

(1) 項目ごとの分析の結果

「教師に対する意識」の調査結果を表 1-1 に示す。教師に対する意識については、全 19 項目の全体の平均値が 3.4 程度で、中程度の意識であった。項目ごとに見てみると、平均値が 4.0 以上で、教師に対する意識がとて高かった項目は、19 項目中 4 項目であった。その内容は次のとおりである。

○ 教師に対する意識がとて高かった項目

- ・「① 教師は社会への貢献度が高い仕事だと思う」「⑦ 教師は社会的に重要な仕事だと思う」
- ・「⑪ 子どもと接することが好き」
- ・「⑲ 自分の理想とする教師に出会ったことがある」

次に、3 年次教育実習の前・後で、教師に対する意識に有意な変化が認められた項目は、19 項目中 5 項目であった。このうち、教師に対する意識に向上が見られた項目が 3 項目、逆に、低下が見られた項目が 2 項目であった。その内容は次のとおりである。

○ 教師に対する意識に有意な向上が見られた項目

- ・「③ 自分は教師の職業ならばやっていける」「⑱ 教師の職業にやりがいを感じる」
- ・「⑲ 自分の理想とする教師に出会ったことがある」

○ 教師に対する意識に有意な低下が見られた項目

- ・「① 教師は社会への貢献度が高い仕事だと思う」
- ・「⑫ 勉強を教えることは向いていると思う」

(2) 因子分析の結果

実習後の事後データを用いた因子分析による「教師に対する意識」の実態を表 1-2 に示す。教師に対する意識について、「第 1 因子：教師になりたい気持ち」、「第 2 因子：教師になる自信」、「第 3 因子：教師の仕事の重要度」の 3 つの因子が抽出できた。

○ 全体的な傾向

教師に対する意識に関する 16 項目全体では、3 年次教育実習の前・後でいずれも中程度の意識で、実習の前・後で有意な意識変化は認められない。3 つの因子間の平均値を比較してみると、事前 ($F=522.14, p<0.05$) および事後 ($F=416.65, p<0.05$) のいずれも 3 因子間で有意差が認められ、「教師の仕事の重要度」の意識が非常に高いのに対して、それと比べると「教師になる自信」と「教師になりたい気持ち」は相対的に低く、中程度である。また、実習の前・後で、因子の平均値に有意差が認められるものは、3 因子のうち「教師になる自信」($F=6.83, p<0.05$) のみで、自信がわずかに低下する傾向が見られる。さらに、実習の前・後で、因子を構成する項目の平均値に有意差が認められるものは、「教師になりたい気持ち」の 2 項目でわずかに向上する傾向、「教師になる自信」の 1 項目でわずかに低下する傾向、「教師の仕事の重要度」の 1 項目でわずかに低下する傾向が見られる。

因子ごとに見られる学生の実態は、次のように要約できる。

○ 教師になりたい気持ち (第 1 因子)

教師になりたい気持ちについては、因子で見ると、3 年次教育実習の前・後でいずれも中程度の意識で、実習の前・後で有意な意識変化は認められない。因子を構成する項目から見ると、「④ 入学以来今までに教師以外の職業を考えたことがある」という一方、「③ 自分は教師の職業ならばやっていける」「⑱ 教師の職業にやりがいを感じる」という意識に実習の前・後で有意な変化が認められ、実習後にわずかに向上する傾向が見られる。

○ 教師になる自信 (第 2 因子)

教師になる自信については、因子で見ると、3 年次教育実習の前・後でいずれも中程度の意識で、実習の前・後で有意な意識変化が認められ、教師になる自信がわずかに低下する傾向が見られる。因子を構成する項目から見ると、「⑮ 努力すればいい授業ができる教師になれる」「② 努力すればいい教師になれる」という自信は、実習の前・後でいずれも高く、実習の前・後で有意な変化は認められない。しかし、その一方、「勉強を教えることは向いている」という自分自身の適性に関する意識に実習の前・後で有意な変化が認められ、実習後にわずかに低下する傾向が見られる。

○ 教師の仕事の重要度 (第 3 因子)

教師の仕事の重要度については、因子で見ると、3 年次教育実習の前・後で意識が非常に高く、教師の仕事の重要度を高く意識している。この高い意識には実習の前・後で有意な変化は認められない。因子を構成する項目から見ると、「教師は社会への貢献度が高い仕事だ」という意識に実習の前・後で有意な変化が認められ、実習後にわずかに低下する傾向が見られる。

表 1-1 「教師に対する意識」の調査結果

教師に対する意識に関する次の①から⑱の項目について、あなたは、今、どの程度当てはまりますか。「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの5段階の1・2・3・4・5のうちから1つ選んで、番号に○をつけてください。

質問項目(全 19 項目) 注) 【逆転項目】については、尺度得点を「5→1, 4→2, 3→3, 2→4, 1→5」の規則に従って変換することで、数値が大きくなるほど肯定、つまり「教師に対する意識」が高いことを意味するように補正してある。	平成 27 年度 3 年次実習 (N=223)			
	事前	事後	有意差	F 値
「教師に対する意識」の項目全体	3.45	3.43	無	0.83
① 教師は、社会への貢献度が高い仕事だと思う。	4.43	4.34	低下	4.41 *
② 努力すればいい教師になれるんじゃないかなと思う。	3.98	3.87	無	3.16
③ 自分は教師以外の他の職業ならばやっていける。【逆転項目】	3.13	3.23	向上	4.68 *
④ 入学以来今まで、教師以外の職業を考えたことがない。	2.52	2.44	無	1.73
⑤ いい教師になるための才能が、自分にはないと思う。【逆転項目】	3.14	3.10	無	0.49
⑥ 自分には教師以外の職業が向いていると思う。【逆転項目】	3.04	3.07	無	0.35
⑦ 教師なんて、社会的には、それほど重要な仕事ではないと思う。【逆転項目】	4.53	4.52	無	0.04
⑧ 採用試験を4, 5回くらい落ちたとしても、教師になることをあきらめないと思う。	2.88	2.83	無	0.77
⑨ いい教師にならなくても、まあまあの教師になればいいと思う。【逆転項目】	3.87	3.88	無	0.04
⑩ 教師以外の職業につきたいと思う。【逆転項目】	3.28	3.31	無	0.27
⑪ 子どもと接することが好き。	4.32	4.37	無	1.02
⑫ 勉強を教えることは向いていると思う。	3.39	3.22	低下	8.05 *
⑬ 子ども(小学生か中学生か)を楽しく活動させる自信がある。	3.26	3.21	無	0.74
⑭ 良い授業をすることは、自分には難しい。【逆転項目】	2.66	2.56	無	2.59
⑮ 努力すれば、いい授業が出来る先生になれる自信がある。	3.66	3.58	無	1.49
⑯ 子どもに指示を出すのは、苦手である。【逆転項目】	3.21	3.13	無	1.10
⑰ おそらく、一生教師という仕事をと思う。	3.10	3.06	無	0.45
⑱ 教師以外の他の職業にやりがいを感じる。【逆転項目】	2.98	3.12	向上	5.07 *
⑲ 自分の理想とする教師に、今まで出会ったことがある。	4.11	4.24	向上	5.90 *

表1-2 因子分析による「教師に対する意識」の実態

因子	質問項目 (⑨⑩⑬を除く16項目)	学生の意識・平均値・有意差・F値		
		項目	因子	全体
第1因子： 教師になりたい気持ち	⑰ おそらく、一生教師という仕事をするとと思う。	中 (3.1→3.1) 無 0.45	中 (2.99→3.01) 無 0.33	
	④ 入学以来今まで、教師以外の職業を考えたことがない。	低 (2.5→2.4) 無 1.73		
	⑩ 教師以外の職業につきたいと思う。【逆転項目】	中 (3.3→3.3) 無 0.27		
	⑧ 採用試験を4,5回くらい落ちたとしても、教師になることをあきらめないと思う。	中 (2.9→2.8) 無 0.77		
	⑱ 教師以外の他の職業にやりがいを感じる。【逆転項目】	中 (3.0→3.1) 向上 5.07*		
	⑥ 自分には教師以外の職業が向いていると思う。【逆転項目】	中 (3.0→3.1) 無 0.35		
	③ 自分は教師以外の他の職業ならばやっていける。【逆転項目】	中 (3.1→3.2) 向上 4.68*		
第2因子： 教師になる自信	⑤ いい教師になるための才能が、自分にはないと思う。【逆転項目】	中 (3.1→3.1) 無 0.49	中 (3.33→3.24) 低下 6.83*	中 (3.32→3.29) 無 2.18
	⑭ 良い授業をすることは、自分には難しい。【逆転項目】	中 (2.7→2.6) 無 2.59		
	⑯ 子どもに指示を出すのは、苦手である。【逆転項目】	中 (3.2→3.1) 無 1.10		
	⑮ 努力すれば、いい授業が出来る先生になれる自信がある。	高 (3.7→3.6) 無 1.49		
	⑫ 勉強を教えることは向いていると思う。	中 (3.4→3.2) 低下 8.05*		
	⑬ 子ども (小学生か中学生か) を楽しく活動させる自信がある。	中 (3.3→3.2) 無 0.74		
	② 努力すればいい教師になれるんじゃないかなと思う。	高 (4.0→3.9) 無 3.16		
第3因子： 教師の仕事の重要度	① 教師は、社会への貢献度が高い仕事だと思う。	高 (4.4→4.3) 低下 4.41*	高 (4.48→4.43) 無 2.04	
	⑦ 教師なんて、社会的には、それほど重要な仕事ではないと思う。【逆転項目】	高 (4.5→4.5) 無 0.04		

注) 【逆転項目】については、尺度得点を「5→1, 4→2, 3→3, 2→4, 1→5」の規則に従って変換することで、数値が大きくなるほど意識が高いことを意味する。
 学生の意識は、「高」=意識が高い：平均値が3.5～5.0の間、「中」=意識が中程度：平均値が2.5～3.5の間、「低」=意識が低い：平均値が1.0～2.5の間
 平均値は、(事前の平均値→事後の平均値)
 有意差は、反復測定による1元配置の分散分析の結果、「*」:有意差 (p<0.05) がある、「無」:有意差がないをそれぞれ意味する。

Ⅲ-2 実習充実度

(1) 項目ごとの分析の結果

「実習充実度」の調査結果を表 2-1 に示す。

実習充実度については、全 15 項目の全体の平均値が 4.3 程度で、とても意識が高かった。項目ごとに見てみると、平均値が 4.0 以上で、実習充実度がとても高かった項目は、15 項目中 12 項目であった。逆に、平均値が 4.0 未満で、実習充実度の意識がやや低かった項目は、15 項目中 3 項目であった。その内容は次のとおりである。

○ 実習充実度の意識がとても高かった項目

- ・「① 実習中は良い意味で緊張感があった」「③ 実習で仲間と助け合うことのすばらしさを感じた」「⑫ 実習は大変だけど経験して良かった」「⑮ 実習で感激する体験があった」
- ・「⑥ 実習を通じて教師という職業にやりがいを感じた」「⑩ 実習を経験することによって教育という行為のすばらしさが少しは理解できた」「⑪ 実習を経験して教師になりたい気持ちが高まった」
- ・「⑧ 実習で学んだことは将来何の仕事についても役に立つと思う」
- ・「④ 実習中のためにバイトやボランティアを休むつもりであった」「⑬ 実習をしなくても教員免許の獲得が出来るとしても、自分は実習には行くと思う」
- ・「② 実習校で指導してくれた先生は尊敬できた」「⑦ 実習校の指導者はいい指導をしてくれた」

○ 実習充実度の意識がやや低かった項目

- ・「⑤ 早く実習を終えたいとは思わなかった」
- ・「⑨ 実習を経験して教師という仕事につきたいという思いが強くなった」
- ・「⑭ 下級生には実習先として自分が行ったのと同じ学校を勧めたい」

(2) 因子分析の結果

実習後の事後データを用いた因子分析による「実習充実度」の実態を表 2-2 に示す。実習充実度について、「第 1 因子： 実習経験のよさ」、「第 2 因子： 教師になりたい気持ち」、「第 3 因子： 実習経験の必要性」、「第 4 因子： 指導教員への満足度」の 4 つの因子が抽出できた。

○ 全体的な傾向

実習充実度に関する 13 項目全体では、3 年次教育実習を経験して、充実度の意識はとても高い。4 つの因子間の平均値を比較してみると、事後の 4 因子間で有意差が認められ ($F=68.09, p<0.05$)、「実習経験のよさ」と「指導教員への満足度」が非常に高いのに対して、それと比べると「実習経験の必要性」と「教師になりたい気持ち」の意識は相対的に低い。

因子ごとに見られる学生の実態は、次のように要約できる。

○ 実習経験のよさ (第 1 因子)

実習経験のよさについては、因子で見ると、3 年次教育実習を経験して、経験自体のよさの意識は非常に高い。因子を構成する項目から見ても、第 1 因子の 6 項目のすべてにわたり、実習経験のよさの意識はとても高い。

○ 教師になりたい気持ち (第 2 因子)

教師になりたい気持ちについては、因子で見ると、3 年次教育実習を経験して、教師になりたい気持ちが高まっている。因子を構成する項目から見ても、実習を経験して「⑨ 教師という仕事につきたいという思いが強くなった」「⑪ 教師になりたい気持ちが高まった」「⑥ 教師という職業にやりがいを感じた」というように、教師になりたい気持ちが高まっている。

○ 実習経験の必要性 (第 3 因子)

実習経験の必要性については、因子で見ると、3 年次教育実習を経験して、必要性の意識はとても高い。因子を構成する項目から見ても、第 3 因子の 2 項目ともに、実習経験の必要性の意識はとても高い。

○ 指導教員への満足度 (第 4 因子)

指導教員への満足度については、因子で見ると、3 年次教育実習を経験して、満足度の意識は非常に高い。因子を構成する項目から見ても、「② 実習校で指導してくれた先生は尊敬できた」「⑦ 実習校の指導者はいい指導をしてくれた」というように、指導教員への満足度の意識は非常に高い。

表 2-1 「実習充実度」の調査結果

3年次の附属学校での教育実習を振り返ってみて、実習の充実度に関する次の①から⑮の項目について、あなたは、どの程度当てはまりますか。

「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの5段階の1・2・3・4・5のうちから1つ選んで、番号に○をつけてください。

質問項目(全15項目) 注) 【逆転項目】については、尺度得点を「5→1, 4→2, 3→3, 2→4, 1→5」の規則に従って変換することで、数値が大きくなるほど肯定、つまり「実習充実度」の意識が高いことを意味するように補正してある。	平成27年度 3年次実習 (N=223)
	事後
「実習充実度」の項目全体	4.25
① 実習中は良い意味で緊張感があった。	4.71
② 実習校で指導してくれた先生は、尊敬できた。	4.78
③ 実習で仲間と助け合うことのすばらしさを感じた。	4.57
④ 実習中でもバイトやボランティアを休みたいはなかった。【逆転項目】	4.22
⑤ 正直なところ、早く実習を終えたかった。【逆転項目】	2.93
⑥ 実習を通じて、教師という職業にやりがいを感じた。	4.34
⑦ 実習校の指導者はあまりいい指導をしてくれなかった。【逆転項目】	4.54
⑧ 実習で学んだことは、将来何の仕事についても、役に立つと思う。	4.54
⑨ 実習を経験して教師という仕事につきたいという思いが強くなった。	3.86
⑩ 実習を経験することによって、教育という行為のすばらしさが少しは理解できた気がする。	4.31
⑪ 実習を経験して、教師になりたい気持ちが薄れていった。【逆転項目】	4.02
⑫ 実習は大変だけど、経験して良かった。	4.69
⑬ 実習をしなくても、教員免許の獲得が出来るとしたら、自分は実習には行かないと思う。【逆転項目】	4.00
⑭ 下級生には、実習先として自分が行ったのと同じ学校を勧めたい。	3.74
⑮ 実習で感激する体験があった。	4.46

表2-2 因子分析による「実習充実度」の実態

因子	質問項目 (⑤⑭を除く13項目)	学生の意識・平均値		
		項目	因子	全体
第1因子： 実習経験のよさ	⑩ 実習を経験することによって、教育という行為のすばらしさが少しは理解できた気がする。	高 (4.3)	高 (4.55)	高 (4.39)
	⑧ 実習で学んだことは、将来何の仕事についても、役に立つと思う。	高 (4.5)		
	⑫ 実習は大変だけど、経験して良かった。	高 (4.7)		
	⑮ 実習で感激する体験があった。	高 (4.5)		
	① 実習中は良い意味で緊張感があった。	高 (4.7)		
	③ 実習で仲間と助け合うことのすばらしさを感じた。	高 (4.6)		
第2因子： 教師になりたい気持ち	⑨ 実習を経験して教師という仕事につきたいという思いが強くなった。	高 (3.9)	高 (4.07)	
	⑪ 実習を経験して、教師になりたい気持ちが薄れていった。【逆転項目】	高 (4.0)		
	⑥ 実習を通じて、教師という職業にやりがいを感じた。	高 (4.3)		
第3因子： 実習経験の必要性	⑬ 実習をしなくても、教員免許の獲得が出来るとしたら、自分は実習には行かないと思う。【逆転項目】	高 (4.0)	高 (4.11)	
	④ 実習中でもバイトやボランティアを休みたくはなかった。【逆転項目】	高 (4.2)		
第4因子： 指導教員への満足度	⑦ 実習校の指導者はあまりいい指導をししてくれなかった。【逆転項目】	高 (4.5)	高 (4.66)	
	② 実習校で指導してくれた先生は、尊敬できた。	高 (4.8)		

注) 【逆転項目】については、尺度得点を「5→1, 4→2, 3→3, 2→4, 1→5」の規則に従って変換することで、数値が大きくなるほど意識が高いことを意味する。

学生の意識は、「高」＝意識が高い：平均値が3.5～5.0の間、「中」＝意識が中程度：平均値が2.5～3.5の間、「低」＝意識が低い：平均値が1.0～2.5の間を意味する。

IV 考察

IV-1 結論

今回の3年次生223名を対象とした実態調査の結果からは、これまで問題視されてきたような『附属学校での3年次実習を経験することで、教員になる自信を失う、教職に対するモチベーションを失う、教師以外の他の職業を選ぶなどの悩みを学生が抱えている』という顕著な傾向が認められるとは必ずしも言えない。今回の調査では、実習前後で、『教師になりたい気持ち』はわずかに高まるが、『教師になる自信』はわずかに低くなる傾向が明らかになった。学生の実態を要約すると、次のとおりである。

- 1) 『教師になりたい気持ち』については、3年次教育実習の前・後でいずれも中程度の意識で、実習後に気持ちがわずかに高まる傾向が見られる。「大学に入学以来3年次の今までに教師以外の職業を考えたことがある」という一方、3年次実習を通して「自分は教師の職業ならばやっつけける」「教師の職業にやりがいを感じる」という教師の職業に関する意識に実習の前・後で有意な変化が認められ、実習後にわずかに高まる傾向が見られる。また、実習充実度という点で、3年次教育実習を経験して「教師という仕事につきたいという思いが強くなった」「教師になりたい気持ちが高まった」「教師という職業にやりがいを感じた」というように、教師になりたい気持ちに高まりが見られる。
- 2) 『教師になる自信』については、3年次教育実習の前・後でいずれも中程度の意識で、実習後に教師になる自信がわずかに低くなる傾向が見られる。「努力すればいい授業ができる」「努力すればいい教師になれる」という自信は、実習の前・後でいずれも高く、有意な意識変化は認められない。しかし、その一方、「勉強を教えることは向いている」という自分自身の適性に関する意識に実習の前・後で有意な変化が認められ、実習後にわずかに低くなる傾向が見られる。

本調査結果より、『教師になりたい気持ち』は高まっていると言えるし、また、実習充実度のどの因子も高得点を示しているので、3年次の附属学校での教育実習の効果はあったと考えられる。かねてより教育学部教員の間では、3年次の附属学校での教育実習がネガティブな要因であろうという印象を抱きがちであったが、現実には、それは単なる印象でしかなかったということが、今回の追跡調査によるデータで証明されたと思われる。また、それと同時に、なぜそのような印象を持つのかという根拠となる片鱗が見られたのではないかと思われる。それが、3年次の附属学校での教育実習を経験することで、『教師になる自信』がわずかに低下するという事実である。このような自信の低下は、今まで現実を知らずに自信過剰だった学生が、教育現場の現実を経験したことによる必要なプロセスだとも解せることから、これもむしろ教育実習の効果とみていいと思われる。ただし、少しの自信の低下くらいがちょうどよく、大きく自信を低下させるようなことは避けなければならないこと言うまでもない。

IV-2 今後の検討課題

今回の調査では、『教師になる自信』について、3年次教育実習を経験することで、わずかに低下する傾向が見られた。教育実習前に学生がもっている意識は仮想現実の中での過信のようなもので、実際に初めて教壇に立って学習指導等を行う附属学校での実習体験を通して、現実の中での自分を知ることによって自信がわずかに低くなっても、それは仕方がないことかもしれない。逆に、自信が低くなるのがむしろ教育実習の効果とも捉えることができるのではなかろうか。長期的な視野から、来年度の4年次教育実習を通して、「やったあ。やってよかった。」という達成感・成就感を伴う小さな成功体験を一つ一つ積み上げていくことにより、学生が教師になる自信を回復させ更に向上させることができるかどうか今後の課題であろう。

また、今回の調査では、『教師になりたい気持ち』について、3年次教育実習を経験することで、わずかに向上する傾向が見られたが、教育実習の前後で、その意識が中程度であること自体を問題視すべきではなかろうか。長期的な視野から、来年度の4年次実習を通して、学生が成功体験と自信に裏づけられた確かなモチベーション・意欲を維持し更に向上させることができるかどうか今後の課題であろう。それと同時に、1・2年次での教員養成教育の機能、例えば、低学年次から子どもとかかわる体験不足、実践型カリキュラムへの移行、教職実践基礎演習の新設などの質的効果が問われることになるであろう。

実習充実度の違いによる教師に対する意識の差

—平成 27 年度 3 年次実習事前・事後調査の結果（Ⅱ）—

教育実習委員長 中山玄三
共同研究者 藤中隆久

I 目的

実習生が感じる実習充実度の程度の違いによって、教師に対する意識の変化に違いが見られるかどうかを明らかにする。

II 方法

(1) 対象：平成 27 年度 3 年次実習参加者全員

(2) 調査の時期と調査の内容

	調査の時期		調査の内容
①	平成 27 年 6 月	3 年次オリエンテーション	教師に対する意識
②	平成 27 年 9 月	3 年次附属実習終了後	教師に対する意識・実習充実度

(3) 調査質問紙の項目の内容構成

	肯定項目	逆転項目
質問紙 A： 教師に対する意識（19 項目）	10 項目 ①②④⑧⑪⑫⑬⑮⑰⑱	9 項目 ③⑤⑥⑦⑨⑩⑭⑯⑲
質問紙 B： 実習充実度（15 項目）	10 項目 ①②③⑥⑧⑨⑩⑫⑭⑮	5 項目 ④ ⑤⑦⑪⑬

(4) 今回の調査

平成 27 年度 3 年次実習の事前オリエンテーション後の 6 月に、「教師に対する意識」（信頼性係数：Cronbach $\alpha=0.88$ ）の調査を実施した。引き続き、3 年次附属学校実習終了後の 9 月に、「教師に対する意識」（ $\alpha=0.89$ ）と「実習充実度」（ $\alpha=0.86$ ）の調査を実施した。対象は、3 年次附属学校実習に参加した教育学部 3 年次生全員 223 名（欠損値を除く）であった。

(5) 分析の方法

調査データの分析に当たっては、まず、逆転項目について、尺度得点を「5→1, 4→2, 3→3, 2→4, 1→5」の規則に従って変換することで、数値が大きくなるほど肯定（否定の否定）、つまり教師に対する意識および実習実度の意識が高いことを意味するように補正することにした。次に、「実習充実度」の質問項目に対する反応率（度数分布）をもとに、意識の違いによって、全体集団を上位群・中位群・下位群の 3 つの集団に分けた。「教師に対する意識」について、意識の構造化を図るために、教育実習後のデータを用いて、主因子法（Kaiser の正規化を伴うプロマックス回転法）による探索的因子分析を行った。そうして、教育実習の前・後で意識に有意な差があるかどうかを確かめるために、上位群・中位群・下位群の各集団で、因子全体・各因子の尺度得点を用いて、反復測定による 1 要因の分散分析を行った。また、上位群・中位群・下位群の因子得点の平均値の間に有意な差があるかどうかを確かめるために、対応のある 1 要因の分散分析を行った。「実習充実度」の違いによる「教師に対する意識」の差との調査結果は、以下のとおりである。

III 結果

3 年次実習終了後に調査を実施した「実習充実度」の項目の中から、実習に臨む姿勢を問う質問項目⑤「正直なところ、早く実習を終えたかった。」に対する反応率（度数分布）をもとに、意識の違いによって、全体集団を上位群・中位群・下位群の 3 つの集団に分けることにした。上位群は「当てはまらない（選択肢 1・2）」と回答した実習に臨む姿勢が積極的な集団（N=59, 26.5%）、逆に下位群は「当てはまる（選択肢 4・5）」と回答した実習に臨む姿勢が消極的な集団（N=77, 34.5%）、中位群は「どちらとも言えない（選択肢 3）」と回答した実習に臨む姿勢が中程度の集団（N=87, 39.0%）である。「実

表3 「実習に臨む姿勢」の違いによる「教師に対する意識」の差

		全体集団 (N=223)	実習充実度の項目⑤: 実習に臨む姿勢「正直なところ、早く実習を終えたかった。」			
			上位群 (N=59, 26.5%) 「当てはまらない(1・2)」	中位群 (N=87, 39.0%) 「どちらとも言えない(3)」	下位群 (N=77, 34.5%) 「当てはまる(4・5)」	3群間の有意差
教師に対する意識の因子得点合計	実習前	3.32	3.63	3.30	3.12	16.93* 群間差有
	実習後	3.29	3.67	3.31	2.97	26.83* 群間差有
	前・後の有意差	2.18 変化無	0.79 変化無	0.13 変化無	11.46* 低下	
第1因子: 教師になりたい気持ち	実習前	2.99	3.42	2.97	2.68	16.31* 群間差有
	実習後	3.01	3.52	3.04	2.57	22.83* 群間差有
	前・後の有意差	0.33 変化無	2.84 変化無	2.53 変化無	4.25* 低下	
第2因子: 教師になる自信	実習前	3.33	3.56	3.31	3.17	8.28* 群間差有
	実習後	3.24	3.55	3.27	2.97	14.71* 群間差有
	前・後の有意差	6.83* 低下	0.02 変化無	0.86 変化無	9.73* 低下	
第3因子: 教師の仕事の重要度	実習前	4.48	4.61	4.41	4.45	3.23* 群間差有
	実習後	4.43	4.62	4.40	4.31	6.38* 群間差有
	前・後の有意差	2.04 変化無	0.08 変化無	0.05 変化無	5.00* 低下	

注: 1) 表中の数値は、5段階評定尺度を尺度得点に換算したときの因子得点の平均値を示す。

2) 実習前・後の有意差は、反復測定による1元配置の分散分析の結果、数値はF値を示し、5%の有意確率水準での有意差の有無を示す。

3) 上位・中位・下位の群間の有意差は、対応のない1要因の分散分析の結果、数値はF値を示し、5%の有意確率水準での有意差の有無を示す。

習に臨む姿勢」の違いによる上位群・中位群・下位群の各集団における、「教師に対する意識」に関する因子全体および各因子の事前・事後の平均値を表3に示す。

「実習に臨む姿勢」の違いによる「教師に対する意識」の差は、次の通りである。

- (1) 教師に対する意識全般については、実習に臨む姿勢が積極的な上位群では、意識が高く（平均値が3.5以上）、実習に臨む姿勢が中程度の中位群および実習に臨む姿勢が消極的な下位群では、意識は中程度（平均値が2.5～3.5の間）である。因子ごとにみると、教師になりたい気持ち（第1因子）については、上位群・中位群・下位群のいずれの集団においても、意識は中程度（平均値が2.5～3.5の間）である。教師になる自信（第2因子）については、上位群では、意識が高く（平均値が3.5以上）、中位群および下位群では、意識は中程度（平均値が2.5～3.5の間）である。教師の仕事の重要度（第3因子）については、上位群・中位群・下位群のいずれの集団においても、意識は高い（平均値が3.5以上）である。
- (2) 実習に臨む姿勢が積極的な上位群の方が、実習に臨む姿勢が中程度の中位群および実習に臨む姿勢が消極的な下位群よりも、教師に対する意識が全般的に最も高く、統計的に有意な差が認められる。因子ごとにみても、上位群の方が中位群・下位群よりも、教師になりたい気持ち、教師になる自信、教師の仕事の重要度のいずれの意識も最も高く、統計的に有意な差が認められる。
- (3) 実習に臨む姿勢が消極的な下位群では、教師に対する意識が全般的に最も低く、教師になりたい気持ち、教師になる自信、教師の仕事の重要度のいずれの意識も最も低い。
- (4) 実習に臨む姿勢が積極的な上位群および実習に臨む姿勢が中程度の中位群では、教師になりたい気持ちは実習後にわずかに高まる傾向、教師になる自信は実習後にわずかに低くなる傾向がみられる。しかし、上位群および中位群では、教師に対する意識全般、ならびに教師になりたい気持ち、教師になる自信、教師の仕事の重要度のいずれの意識についても、3年教育実習の事前・事後で統計的に有意な差は認められなかった。
- (5) 実習に臨む姿勢が消極的な下位群では、教師に対する意識全般、ならびに教師になりたい気持ち、教師になる自信、教師の仕事の重要度のいずれの意識についても、実習後に低下する傾向が顕著にみられ、3年教育実習の事前・事後で統計的に有意な差が認められた。

IV 考察

IV-1 結論

本分析結果より、「実習に臨む姿勢」の違いによる「教師に対する意識」の差が歴然と現れた。実習に臨む姿勢が積極的な上位群(N=59, 26.5%)では、教師に対する意識が全般的に最も高く（平均値が3.5以上）、教師になりたい気持ち、教師になる自信、教師の仕事の重要度のいずれの意識も最も高い（平均値が3.5以上）。逆に、実習に臨む姿勢が消極的な下位群(N=77, 34.5%)では、教師に対する意識は全般的に最も低く、教師になりたい気持ち、教師になる自信、教師の仕事の重要度のいずれの意識も最も低い。かつ、下位群では、教師に対する意識全般、ならびに教師になりたい気持ち、教師になる自信、教師の仕事の重要度のいずれの意識についても、実習後に低下する傾向が顕著にみられた。つまり、これまで問題視されてきたような『附属学校での3年次実習を経験することで、教員になる自信を失う、教職に対するモチベーションを失う、教師以外の他の職業を選ぶなどの悩みを学生が抱えている』という顕著な傾向が認められるのは、実習に臨む姿勢が消極的な下位群(約3割)においてである。逆に言えば、実習に臨む姿勢が積極的な上位群(約3割)および実習に臨む姿勢が中程度の中位群(約4割)では、そのような顕著な傾向は認められないということである。

IV-2 今後の検討課題

教員養成の質保証という点からすると、「実習に臨む姿勢」ならびに「教師になりたい気持ち」、「教師になる自信」、「教師の仕事の重要度」のいずれの意識も高い上位層(約3割)をより一層拡大すると同時に、それらの意識が低い下位層(約3割)を少しでも解消することが、今後の検討課題と言えよう。3年次教育実習以前の問題として、大学入試での面接の導入、1・2年次での教員養成教育の機能、例えば、低学年次からの子どもとかかわる体験、実践型カリキュラムへの移行、教職実践基礎演習の新設などの質的効果が問われることになるであろう。また、3年次教育実習以降の問題としては、副実習の履修のあり方、実習の履修困難者に対する特別措置等の個別支援のあり方などを検討する必要があるかもしれない。

第2部

「3年次教育実習のあり方」に関する 協議報告

「3年次実習のあり方」についての協議

—平成27年度3年次実習事前・事後調査結果を踏まえて—

教育実習委員長 中山玄三
共同研究者 藤中隆久
実習充実運営小委員会座長 山崎浩隆

平成28年2月17日（水）開催の臨時の教育実習委員会において、実習生の教師に対する意識に関する追跡調査結果の概要報告が、共同研究者の藤中教授よりなされた。その結果を踏まえて、3年次実習のあり方について、実習充実運営小委員会座長の山崎委員を中心に、協議を行った。その概要は、以下の通り、要約できる。

I 3年次実習事前・事後調査結果の概要

3年次実習に行くと、教師になる自信が下がるが、教師になりたい気持ちは下がっておらず、むしろ上がっている。実習充実度が高いことから、「学生にとってはいい経験になった」といえる。今後、4年次実習を経験することで、だんだんと意識が高まっていき、最後には自信も教師になりたい気持ちも高まるだろう。ユア・フレンドの場合、不登校の子どもと合ったこともないときは自信が高いが、10回程度合ってみると自信が下がり、20回を超えると自信が高まることが確認できている。このような傾向は正常な発達過程といえる（藤中教授）。

このような傾向は、養護教諭養成課程の教育実習前後の追跡調査結果からも同様の結果が伺える。

どのような学生が、自信をなくするのか、どの学校、どの学年で実習した学生が自信をなくするのか、より細かく分析してみれば、もっとわかることがあるかもしれない（心理学科委員）。では、どんな人が自信が下がるかという、早く実習を終えたいと思っている・やる気のない人である。やる気のない学生のやる気を引き出すことが大切である（藤中教授）。

II 「3年次実習のあり方」についての協議

1. 実習中に意欲・自信が下がる要因

自信をなくす要因は、学生の予想と現実の子ども・授業との間のズレ・ギャップに不安や戸惑いを感じることである。附属学校園の委員からは、次のような意見等があった。

- ・ 毎日の授業や生活で、学生が考えていた理想通りにはいかないこと。一人一人の思いに応じながらも集団として育てることの難しさ。多様な子どもを相手に、様々な手立てで、きめ細かな配慮や言葉かけを行う授業の難しさ。子どもの主体的な学びを引き出す授業づくりの難しさなど。自信の低下は、本物の仕事に出会った結果を物語っている。
- ・ 実習期間内で児童生徒の様子を捉え、授業を計画的に進めることの難しさなど。
- ・ 極端に自信が下がるような心が折れる要因については、学生間のコミュニケーションがとれない過年度生などの学生が、グループで共同で1つの教材・授業をつくっていくときに、孤立してさらに閉じこもってしまうケースが見られる。
- ・ 4年次附属幼稚園実習にくる学生の中には、3年次実習で自信をなくして教員以外の職業につくことを希望する人がいる。教えるのは苦手だけでも、幼稚園児とならば遊ぶことができるという学生もいる。

2. 実習中に意欲・自信を高める働きかけ

「授業力」にかかわる自信は、子どもの反応の良し悪しによって決まる。子どもの反応のよさから成功体験を味わうことが自信につながる。また、授業以外の時間に子ども一人ひとりとかかわることで、「子ども理解力」が高まる。附属学校園の委員からは、次のような意見等があった。

- ・ 目指す教師像の少し高い基準を明確にもち、それを達成できたとき、きちんと評価することで、成功体験につなげる。
- ・ 最初は授業がうまくいかない。時間が足りずに途中で終わったり、まとめを学生が言ったりする。想定した授業が少しうまくいくようになる。子どもの反応が思っていたよりもずっとよい反応があつて、授業をしてよかったと思える。
- ・ 子どもの反応からわかる。集まってくれた、聞いてくれた。工夫したことで、子どもの反応が変わる。よかったと思えて自信を持てる。指導教員が個別にレベルを下げて、徐々にステップアップしていく。
- ・ 休み時間、昼休み、学級指導の時間、放課後などに、学生が子ども全員と話をする機会をもつことが、「この子はこういう力をもっている」など、子ども一人ひとりを理解する上で大切である。

3. 意欲・自信が下がった学生への対応・アフターケア

3年次実習をより充実したものにするためには、実習内容を見直すよりも、むしろ、成長に結びつけるためのアフターケアをいかに行うかを考えることが肝心である（英語科委員）。

心情面で同じ悩みをグループで共有すること、語り合うことが大切である。3年生の5~6人のグループの中に、4年生を1人入れて、つまづきがわかる、同じ思いをしたが、それを克服できた体験談を聞くと、自分も頑張ってみようというやる気が醸成される。セルフ・ヘルプ・グループが有効である。自信を少しなくした程度であれば、日々の生活の中で自然に回復していくので、心配はない（藤中教授）。

4. 3年次実習に臨む姿勢・態度と事前指導・教員養成カリキュラムのあり方

3年次実習に期待することとして、附属中学校の委員より、誰でも初めからスーパーティーチャーではないので、学生には「やる気・意欲」「素直さ」「探究心」「仲間同士のコミュニケーション力」などが大事であるとの指摘があった。

学部での3年次実習までの事前指導として、1・2年次での教員養成教育機能の充実、とりわけ「教職実践基礎演習」、「2年次観察実習」、専門教育での「模擬授業」などの充実があげられる（社会科委員他）。また、学部の教員養成カリキュラム全体の課題として、どういう教員を養成するのかという **diploma policy** を再考し、そのために必要な **curriculum policy** を再構築し、その **policy** に合致した入試方法で学生を確保する必要がある（理科委員）。

最後に、附属学校園には教育実習を通して教員養成を行う使命があり、FD活動等を通して、教員養成機能の充実に努めていただきたい（実習充実小委員会座長・音楽科委員）。

「3年次実習のあり方」について学科からの意見等

国語科実習委員 神野雄二

3年次実習のより良い在り方について考えてみたい。

「実習生の教師に対する意識に関する追跡調査（第1報）－平成27年度3年次実習事前・事後調査の結果－を」の分析結果から、学生の実習を経験しての実習そのものに対する不安と、教師という職業への不安が見え隠れしていないだろうか。今回の調査では、実習前後で、「教師になりたい気持ち」はわずかに高まるが、「教師になる自信」がわずかに低下する結果が出ており、その理由の検討と、それへのケアの大切さが求められていよう。

この度の分析結果の結論と検討課題に重複するが、3年次実習のより良い在り方を考えていく上で、以下の諸点が考えられよう。

- ①実際の実習の体験を、可能な限り一つ一つ多く積み上げていく
- ②1・2年次での教員養成教育の機能の充実、中でも「教職実践基礎演習」の充実。
- ③専門教育での教育法などでの実際の模擬授業などの経験。

実際の体験を積み重ねていくことにより、学生が教師になる自信を取り戻し、更に向上させていけるかどうかは今後の課題であろう。

また、現今、教育（学校）の現状と問題を理解し、有効な解決策を考えることができる学校教員の必要性が高まっているが、即戦力としての教員とともに、長期的視野に立った教員の養成が求められているといふ。

社会科実習委員 竹中伸夫

3年次実習のあり方についてとのことだが、なぜ3年次だけに焦点化するのかよくわからない。

表1-1の全19項目のうち、有意な差のある5項目より、①教師という職業へのイメージの悪化、③教師に対する自信の喪失、⑫同じく自信の喪失、⑱教師に対する意欲の喪失、⑲実習の指導教員がロールモデルとして有効、という傾向が読み取れる。

3年次実習前後での変化ではあるが、実習までの積み重ねの不十分さがこうした意欲や自信の喪失へとつながっている可能性もあるため、教員養成カリキュラム全体を通して、こうした縦断的な調査が必要である。

その上で、教職実践基礎演習を受講している現1年次生に対する2年次の観察実習の内容の改革を含む、教育実習プログラム全体の見直しが急務であろう。その際、実習の評価規準の明確化と教育実習プログラム全体のルーブリックの策定、それに基づく各実習終了時における到達度の明示を行い、指導教員による差を極力減じる方向での改革を求む。

理科実習委員 村田貴広

委員長の中山先生のもと、しっかりとした調査・分析が行われていまして、おかげさまで、教員が学生から受けるなんとなくの印象が、データに基づいた実態が示されており、大変意義深く拝読いたしました。

アンケート内容に対します的確な考察によりまして、種々検討することができました。附属学校で

の実習が教員希望の低下に関連しているかに憂慮している中、総合的なデータからはそのような顕著な傾向が認められるとは必ずしも言えないとのことで一安心しました。一方で、個別データをみますと、ほとんどの項目でポイントが減少していますので、この傾向に対してはより慎重な精査が必要ではないかと思われます。子どもと接することが好きの4.3ポイントに対しまして、勉強を教えることは向いていると思うが3.3ポイント程度で、この隔たりが教育学部の学生の現状をよく表しているでしょう。教師は、勉強を教える人ではなく、学習の支援者であるという認識を基盤にして、子どもと接することは好きでも勉強を教えることに自信がない学生に対して、現場体験とのバランスを保ちつつ、経験に裏打ちされた確かな専門的知識を習得するために、どのように教育し、高めることができるか、これからの教員養成として益々重要であり、よく考える必要があると思います。もっと「教える」自信につながる学習内容について知識理解を深め、「教える」楽しさと難しさを感じることができるよう、子どもの学びをプロデュースするための知識と方法を学ぶ場を提供することが重要な課題ではないでしょうか。そのためにも、もう一度、diploma policy を改めて熟考し、そのために必要な curriculum policy を再構築し、diploma policy を達成するための admission policy を定めて、これらの policy をよく理解していただけるように広報するとともに、この policy に合致した入試方法で学生を確保する必要があるのではないかと思います。

音楽科実習委員・実習充実運営小委員会座長 山崎浩隆

今回、3年次実習を経験した学生全員を対象とした調査から実習を経験することによる意識の変化が明らかにされた。しかし、学生はそれぞれ附属中学校、附属小学校、附属特別支援学校での実習を行っており、各附属学校で教科別あるいは学級別に指導を受けている。今回の調査ではその教科ごとあるいは学級ごとの学生の意識は明らかにされていない。

教育実習は教員養成カリキュラムの中の一つではあるが、それを行うのは一人一人の指導教員である。ご担当していただく先生方の指導の仕方によって学生の意識は大きく変わるはずである。各先生に、よりよい教育実習をめざした指導改善に協力していただけると、学生の教職に対するモチベーションはさらに上がるのではないだろうか。

各附属学校園には教育実習を通して教員養成を行うという使命もある。附属学校園においても教育実習に関するFD活動を行っていただき、教員養成機能の充実に尽力いただくことはできないだろうか。

美術科実習委員 赤木恭子

3年次の実習を通して、調査の結果、教職への自信がやや低下する傾向について、学科が担うべき課題を検討するためにも、その原因の詳細について明らかにすることが望まれる。

学科として、現状における見通しは以下の通りである。

教育現場で求められる様々な状況に対する教師としての関わり方に加えて、美術科では、各主題に基づき構成される授業内容に対する考察力や教材開発力、実践においては、場に応じた指導方法の広がりに対応しうる表現力等が常に問われる。そのため、こうした実践を見据えた学科で学ぶ専門的な学習内容に対して、実習現場の指導教官や児童・生徒との関わりに集約される学びに活かされるようなロールモデルや、学科と実習校との連携のあり方への施策を求めていくことが、「積み重ねとしての3年次実習」として、また、「教職に対する見方を深められる」ような、学科の実習生への心身と学

修に対する支援体制の充足につながるものとする。

生涯スポーツ福祉課程実習委員 坂本将基

本課程では3年次実習を実施していないため、課程としての意見はございません。

技術科実習委員 引地力男

教育実習生の自身の低迷の原因の一つとして授業づくりがあげられる。2年生は附属学校での観察実習のみならず、授業づくりの一環として「模擬授業」の指導（ゼミ形式可）について年間を通して学科ごとに行なう。1つのテーマ（課題）について納得いくまで、学生の自信が付くまで徹底して指導する。研究室配属の4年生や院生が指導に関われば教員の負担も軽減される。これまでの経験で苦手な学生は10回、得意な学生でも3回ほど授業の手直しが必要とされるので、平均5回かかるとして一人あたり年間5から6テーマの模擬授業が完成される。その結果、3年次の教育実習には安心して望むことができる。

また、教育実習だけでは学べない項目として、生徒指導、学級経営、保護者や地域との関わり等があげられる。現在参加者の少ない学びノート、スクールトライへの参加の義務化、さらに、近隣学校の放課後指導、学校行事の参加（運動会なら準備から後片付けまで）の導入等で学校との距離が縮まる。これらは教務、厚生就職、教育実習の3委員会で総合的に検討しなければならない。

家政科実習委員 中迫由実

報告書に記載のとおり、3年次実習を附属学校で行う現行の実習実施体制に問題はないものと考えます。附属学校での実習前後における意識の変化についての調査を見る限り、自信の低下などの影響が顕著には見られず、また附属学校での実習と公立学校での実習を比較検討した調査でないことから具体的な差異は明らかではないですが、公立学校に比べて教育実習の受入体制が充実していることから、3年次実習は引き続き附属学校において行うのが妥当であると考えます。

なお、報告書の結果から3年次実習において「教師になる自信」の低下がみられる点については、事後指導や機会を見て学科等で個別にフォローしていくことで、対応は可能ではないかと考えます。

英語科実習委員・副委員長 村里泰昭

英語科では、1月26日開催の学科会議において、「実習生の教師に対する意識に関する追跡調査(第1報)」を踏まえて3年次実習のあり方について議論しました。

英語科にも、3年次実習で躓きを感じ、それを期に教員の道に見切りをつける学生がいることは確かです。しかし、3年次実習のあり方を考える上で、その事実を必ずしも否定的に捉えるべきではないことが今回の調査結果からわかりました。

3年次実習をより充実したものにするためには、実習内容を見直すよりも、むしろ、学科における事前指導と、躓きを成長に結びつけるためのアフターケアをいかに行うかを考えることが肝心です。

必修科目数が減少したことにより、選択科目で提供されている教案・教材作り、模擬授業等を行う経験が乏しいまま教壇実習に臨み、貴重な躰きの経験が形式的な側面にとどまってしまう場合があることは、検討すべき課題の一つとして改めて確認されました。

特別支援教育学科実習委員 藤原志帆

調査結果の報告を特別支援教育学科で検討した結果、以下のような意見が出された。

- ・3年次附属実習を経験することで学生の「教師になる自信」がわずかに低下するという調査結果から、3年次実習が学生にとって自分を知る機会になっている可能性がうかがえる。
- ・今回の調査結果の平均値から、3年次実習前後の学生の意識について、全体の傾向を把握することができた。今後、実習前に「教師になりたい気持ち」や「教師になる自信」が低かった（高かった）学生が実習後どのように変化したのかなど、個別の事例に目を向けた分析の結果も把握した上で、実習充実に向けた方策を考えたい。
- ・今後、4年次附属実習や協力校実習の追跡調査結果も踏まえて、3年次実習が学生の教師に対する意識にどのような影響を与えているのかを検討したい。

養護教諭養成課程実習委員・副委員長 松田芳子

アンケート結果につきまして、下記のような感想が挙げられました。

- ・「実習生の教師に対する意識に関する追跡調査（第1報）」について、充分解析されていると思います。「教師になる自信」について、どんな事、どんな職業でもはじめから自信がある、というのはほとんどないと思います。やはり、ある程度のショックは必要で、そこを乗り越えていかねばならないと思います。考察のとおり知識を得、経験を積み重ねていくことが大切だと思います。
- ・3年次実習は、教師を目指す上で、いい経験になっているようです。ただ、多かれ少なかれ、自分に足りない所に気づき、場合によってはそれが自信の喪失につながっている可能性もあるので、事後に各学生の経験、意見も踏まえて、事後指導を今後さらに充実させていけばいいのではないかと、思いました。

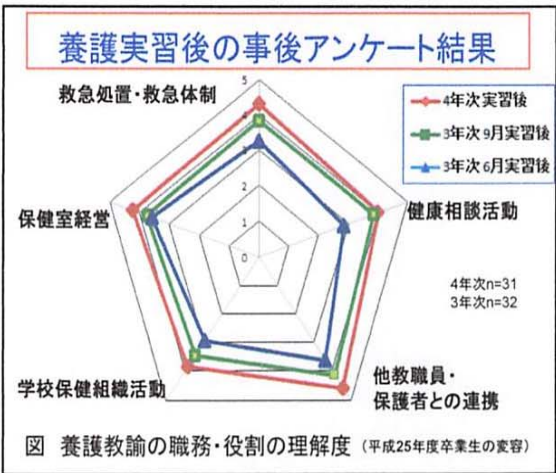
本課程では、2年次、3年次、4年次実習の事後アンケートを毎回とるようにし、学生の変容を把握するようにしています。学科アンケート結果と今回の教育学部全体のアンケートは同様の傾向にありました。

養護教諭養成課程では、2年次実習後、3年次実習後、4年時実習後に実習への参加意欲態度の自己評価、養護教諭の職務・役割の理解度、養護教諭への志向度の変容等についてアンケートを実施しています。本課程の調査結果でも、3年次実習後では、養護教諭への志向への迷いが感じられる学生も少なくありません。その理由を自由記述で回答を求めたところ、「実習を通して養護教諭の実際を知り、大変な仕事であると思った反面、とてもやりがいのあるものだと感じたから」など実習を通して、学校や養護教諭(教師)の職の大変さを感じ、自分にできるだろうかなど迷いが生じていることがわかります。4年次実習では、志向観の高まりが見られます。自分の養護教諭の職務・役割の理解度は、2年次実習から3年次、4年次と実習が進むにつれて、理解度が深まっていることが把握されています。本課程の調査でも今回の教育学部3年次実習事前・事後調査結果と同様の結果が得られています。

養護教諭養成課程でのアンケート調査結果(平成25年度卒業生)の調査結果をスライドにまとめ抜粋したものを、以下に示します。

このアンケート結果を学科の教育実習の指導や個別指導にいかすようにしています。

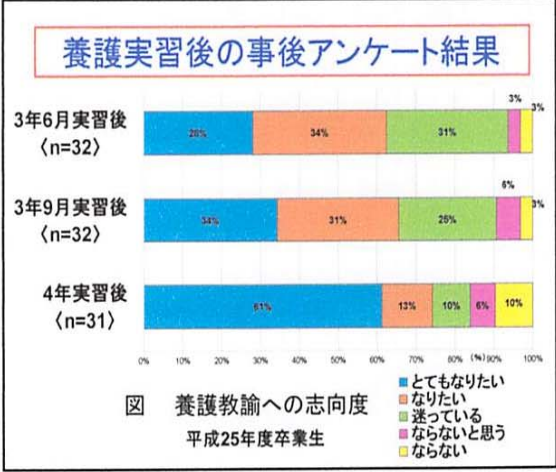
- 教育実習事後アンケート項目**
(養護教諭養成課程)
1. 実習への参加についての自己評価
 2. 養護教諭の職務・役割について理解度
 3. 協力校実習により学んだもの、得たもの (自由記述)
 4. 実習での自己の反省点、今後の自己の課題と思われるもの (自由記述)
 5. 実習でもっと学びたかったこと、経験したかったこと (自由記述)
 6. 現在の時点での養護教諭への志向度 等



- 養護実習後の事後アンケート結果**
- 充実感が得られた理由 (抜粋)
- 【3年次6月実習】
- ・実際に児童と関わって実態も分かったし、自分で多くの学びを見つけたから
 - ・学んだことも多くあり、達成感も得て、9月に向けてのいい6月実習になったと思うから
- 【3年次9月実習】
- ・生徒との関わりや保健室対応なども6月より積極的にできているから
 - ・養護教諭としての知識不足を痛感し、さらに自己の課題を見つけたため
- 【4年次協力校実習】
- ・保健室経営について詳しく知ることができ、生徒と触れ合うことができたから
 - ・様々な行事等を通し、養護教諭だけでなく教師の仕事を知ることができたから

- 養護実習後の事後アンケート結果**
- 志向度: なりたい理由 (抜粋)
- 【3年次6月実習】
- ・迷いもあったが養護教諭の姿より素敵だと思ったから
 - ・実習を通してやりがいのある職業だと思った
 - ・児童生徒と触れ合って、子どもと関わる職業につきたいと思った
- 【3年次9月実習】
- ・子供の人生や生涯の健康に関わることが出来る素晴らしい職業だと思うから
 - ・実習を通して養護教諭の実際を知り、大変な仕事であると思った反面、とてもやりがいのあるものだと感じたから
- 【4年次協力校実習】
- ・実習を経験することに魅力を感じた
 - ・実習を通して思いが強くなった
 - ・実習で生徒と関わって学校で働きたいという気持ちが強くなり、養護教諭という職業の素晴らしさを改めて感じたから

- 養護実習後の事後アンケート結果**
- 志向度: 迷っている・ならない理由 (抜粋)
- 【3年次6月実習】
- ・自分が目指す職業ではない
 - ・自分がなっているイメージがつきにくい、不安がある
- 【3年次9月実習】
- ・他にも関心のある職業がある
 - ・実習を通してその大変さや難しさから自身を持っていない
 - ・とても重大な職業であることに責任が持てない
 - ・自分にははむいていない
- 【4年次協力校実習】
- ・難しい仕事だと思う ・不安も増した
 - ・本当になりたいのが疑問に思うようになった
 - ・採用が少ないため
 - ・自分がかかわりたい業界・職種が他にあるため



教育学科実習委員 今井伸和

教育学科では、実習のあり方の提言というよりも、むしろ、調査そのものに対する意見や、その調査の背景にある、われわれの、学生に対する見方についての疑義が多く出された。したがって、以下にそれらを記す。

- ・小学校課程と中学校課程とを分けて調査していないので、判然とした結果が出なかったのかもしれない。それぞれの課程を分けて調査していれば、もっとはっきりした差異が出たのではないか。
- ・「意欲」というような漠然とした内容で実習生全員を調査対象とするよりも、心が折れた要因について個別に聞き取り調査をしたほうが改善策が見つかるのではないか。
- ・単年度で結論を出すべきではないと思う。
- ・無批判に「意識」・「意欲」の向上に着目することの正当性はどこにあるのか。そのような紋切り型の見方によって見失われるプラスアルファのほうが大切なのではないか。そういう意味では、中程度の意欲でいいではないか、とも言える。「教師こそ我が道」などという凝り固まった見方の方が、かえって融通が利かず、支障をきたすのではなかろうか。

心理学科実習委員・実習充実運営小委員会委員 高崎文子

- ・実習の充実度は高いので、附属小中で、いい経験しているのだらうと思う。
- ・「教師になる自信」因子が、実習を経験して少し下がる傾向があるが、大学生教育において、この点をどう解釈するか議論があると思われる。初めて本格的な実習を経験して、自信が低下することはいいことなのか、悪いことなのか、判断が難しい。ただ、今時の大学生は、みんな打たれ弱いので、自信喪失になってしまうと立ち直れない可能性がある。どのような学生が、自信をなくするのか、どの学校、どの学年で実習した学生が自信をなくするのか、より、細かく分析してみれば、もっと分かることもあるかも知れない。
- ・教師の仕事の重要性については、みんな高く評価しているので、これは、教育学部における教員養成教育の成果かも知れない。

地域共生社会課程実習委員 山城千秋

本調査が「3年次付属学校実習に参加した教育学部3年次生全員223名」ということで、本課程の学生は対象外となっているため、新課程として付属学校の実習についてコメントする立場にない。ただ、2年次の観察実習では、附属中学校にお世話になっていることから、3年次の実習を観察する限りにおいて言えることは、母校実習とは違う緊張関係と厳格さがあり、教師になる心構えを学ぶ機会となっていることは有意義である。

教育学部の教育実習の特色は、積み上げ方式である。そこで、まず、3年次実習を終えた学生が4年次実習に臨む際にどのような課題があるのか、4年次実習の課題を克服するためには、3年次までにどのような準備が必要なのかについて、まとめてみたい。

平成27年度4年次附属校実習(Ⅱ)では、無断での遅刻、心身の体調不良による欠席・成績保留、事故による怪我などが報告された。3附属学校に共通する遅刻や心身の体調不良の問題は、普段の大学生活における「基本的な生活習慣」、「心身の健康管理」に関わることであるため、1年次から4年次までを通して、日頃からの学生に対する生活指導を各学科の実習委員の先生に委員長としてお願いしておきたい。実習委員会では、平成27年度より、2年次実習事前オリエンテーションで、心身の健康管理に関わる講話を新規に導入した。

平成27年度4年次協力校実習(Ⅲ)では、①学ぶ意欲、積極性、謙虚な姿勢、②子どもとの関わり方、指導者としての子どもとの距離、③教科指導では指導案作成、子どもの学習状況を見て取りながら授業を行う力、④生徒指導ではやんちゃな子どもへの対応、毅然とした態度で子どもと接すること、⑤部活動への積極的な参加、⑥実習の履修困難者や実習中の辞退者などが主な課題であった。このうち、特に、「実習に臨む姿勢・態度」、「児童・生徒と関わる体験」、「教科の授業力」の3つの事項については、3年次実習の経験が4年次実習の重要な土台となるため、学部の3年次実習事前オリエンテーションでの意欲づけ、ならびに附属学校での6月・9月分離型実習のメリットを生かした学生指導のより一層の充実を委員長としてお願いしておきたい。

ちなみに、6月・9月分離型の3年次実習のメリット等について、附属小・中ともに、1) 9月に集中すると「疲労度」が重なり持たない学生がいること、2) 夏休みを利用して9月実習に向けて「教材研究」などしっかりと準備ができること、3) 「モチベーション」を保つ手段として8月中もしくは9月初旬に、日程には明記されていないが、1~2日程度9月実習の事前打合せを行っていることなどの報告が平成27年度実習充実運営小委員会であり、委員長として附属特支でもご参考にしていただければと願う。

なお、平成27年度3年次附属学校実習では、挨拶・服装・雑談、印鑑忘れ、無断での遅刻、実習途中からの欠席、病欠、社会人としての自覚不足、おとなしい、コミュニケーション不足など、「実習に臨む姿勢・態度」を中心とした課題が報告された。

総じて、「基本的な生活習慣」、「心身の健康管理」および「実習に臨む姿勢・態度」、「児童・生徒と関わる体験」、「教科の授業力」などの課題に留意しつつ、3年次実習のより一層の充実を図ることを委員長として最後にお願ひしておきたい。

「3年次実習のあり方」について附属学校園からの意見等

附属小学校実習部長・実習充実運営小委員会委員 水上洋平

1 アンケート結果について

(1) 現状より

今回のアンケートの結果より、実習を経験することにより「教師になりたい気持ち」が若干高まり、「教師になる自信」が若干低下する傾向が見られた。この2つのことについて考察する。

(2) 考察、今後について

自信が低下したことに関してその原因としては、毎日の授業や生活において、これまで学生が考えていた理想通りにはいかないことが挙げられる。子どもたちは、一人一人異なる環境で育ち、異なる考え方をもった独立した人間である。つまり「子どもとはこういうものだ」と自分の考えや経験でとらえていた実態とは大きく異なる個がクラスに40人存在し、一人一人の思いに応じながらも集団として育てる難しさを感じた結果だと言える。

また、学習においても同様のことを指摘できる。多様な実態があり、先行知識がある子どもや躓きがある子どもの中で、最適な教材を準備し授業中に様々な手立てをとり、きめ細やかな配慮や言葉かけを行わなければならない授業の難しさを体験したからこそその「自信低下」だととらえられる。

また、「授業とは教師が教える」という旧態依然とした授業観をもつ学生も多く、子どもの主体的な学びへ誘う授業作りの難しさも感じたことだろう。これらのことを鑑みると、アンケート結果における「自信の低下」は、必ずしもマイナス評価という意味ではなく本物の仕事に出会った結果を物語っており、学生は多くのことを学んだ結果と考えられる。これが「自信は低下した」にも関わらず「なりたい気持ちは高まった」というアンケート結果の内実ではなかろうか。

我々担当教官としては、授業作りの基礎基本を学生に学ばせる中で、子ども一人一人の考えを大切にすることを常々伝えている。教師主体の授業ではなく子ども主体の授業こそ教員が目指すものであり、学生にもしっかりと意識付けながら指導にあたりたい。

2 時期について

蛇足かもしれないが、今のような2期にまたがった実習を今後も継続して頂きたい。根拠として「学生の心身面の負担の軽減」「教材研究する時間の確保」である。常に子どもと接し、夜遅くまで教材研究を行う必要があるため、心身面での疲労は大きなものがある。期間の長い後期では学生の疲れが目に見えて分かる。事故防止、体調管理の点から見ても、今の分離型でなければ厳しいと言える。また、分離型であると、前期に感じた授業作りの難しさをもとに夏休みを使って準備ができるメリットがある。

以上の点から、本校としてはこれまでと同様の分離型での実習の時期を希望する。

附属中学校実習部長・実習充実運営小委員会委員 田代博士

3年次実習に期待すること

- 子どもと活動することが好きだという思い
- 使命意識を持って臨むこと
- 間違いを間違いと素直に受け入れることのできる心と意思
- 探究心を持って臨むこと
- 何でも吸収しようとする柔軟な思考
- 実践力

- 忍耐力
- 子どもとのコミュニケーション力
- 仲間同士のコミュニケーション力
- 傾聴力

- ・教師とは、人間形成の仕事であるということ。まずは、模範としてあらねばならない。
- ・教師とは、常に向上心を持って望むべき仕事である。接する子どもたちが、教師として成長させてくれる。素直な心で、いかに多くの子どもたちとコミュニケーションをとるのか。それが、授業だけでなく生徒指導や進路指導などにおいてもよい教師として成長させてくれる。そして、教師になる自信をつけてくれる。
- ・はじめからスーパーティーチャーである人はいない。どんなことでも吸収しようとする意欲とやってみようというやる気、そしてそれを実践する努力が必要である。教師の学習意欲が大事。
- ・教師の仕事は人間形成であるため、悩みも多い。また、授業以外にやらなければならないこともたくさんある。一人では解決できないことがたくさんあるので、仲間とコミュニケーションを取り、物事に当たるすべを身につけて欲しい。

附属特別支援学校実習部長・実習充実運営小委員会委員 西川由里子

教師になる自信がわずかに低下していることは、実習期間内で児童生徒の様子を捉え、授業を計画的に進めるなどが難しかったことが関係していると考え。実習初めに指導教官と学生が話をする機会を作っているが、その項目については教師間で共通理解を図り、モデルとなるよう教師の授業を参観する時間を増やすことも検討したい。

今回は配慮を必要とする学生が多く、指導案や教材作成等で個別に指導助言することも多かった。自分自身の適正に関する意識が実習後に低くなる傾向は、やむを得ないと感じる面もあるが、実習の中で少しずつ成長できるよう、学生の頑張っている所や成長を、今後も指導教官が気づいて伝えるようにしていきたい。指導教官から、教員になって良かったことなどのエピソードを聞く機会を作るとも、指導教官との距離感を縮め、その後の指導助言がお互い伝わりやすくなるのではと考える。

附属幼稚園実習部長・実習充実運営小委員会委員 浅尾理恵子

4年次実習までに、身につけておいて欲しいと願うこと

- 子どもが好きで、子どもとかかわることが楽しいという心の豊かさ
- 一人一人の幼児をよく見て、一人一人の幼児を理解しようとする幼児への共感性
- 研修意欲が旺盛で、日々成長していこうする積極性
- 規則正しい生活を送り、2週間の実習を元気に過ごす心身の健康

教育実習ガイドブックに幼稚園の保育指導案の例も載せるなどして、多くの学生に幼児教育に興味をもち、幼児教育にかかわってほしいと願っている。

3年次実習の在り方

—教員養成大学としての役割—

附属教育実践総合センターシニア教授・学生支援相談室長 定政節夫

1 教育実習に臨む実習生の一部に見られる姿

無届け欠席、遅刻、二日酔いでの出勤、自転車・バイク等での通勤のマナー、服装、頭髪、装飾品等、授業中の携帯の使用、実習中のアルバイト、実習校での恋愛関係、買い食い、指導案が書けない、教材研究の取り組み方、教壇実習に耐えうる学力、謙虚さがない、教科指導は簡単と考えている、授業中のおしゃべり、指導に対し「自分は教員志望ではないから・・・」と答える実習生など。

2 教育実習生の生活指導場面での特徴

- ・ 実習生は、実習当初受け身になりがちであり、児童生徒へ指導するということに躊躇する姿が見られる。
- ・ 実習生は、実習当初指導者としての心積もりができておらず、傍観者的に児童生徒を見守ることが多い。しかし、日が経つにつれて児童生徒への指導も行えるようになってくる。
- ・ 実習当初は児童生徒や学級への批判的な見方をしていた者が、実習後半には問題解決的な見方へと変化してくる。
- ・ 実習生の指導は、当初担任教師の言動をまねるものが多く、模倣しながら試行錯誤している姿が見られるが、それぞれが明確な意図を持ち指導できるようになってくる。しかし、中には自分ならこのように指導するという代案を強固に主張する者もあらわれる。
- ・ 担任教師の学級を借りて実習していることを忘れがちであり、指導が通ることを経験すると全ての指導が通用すると考えてしまう実習生もいる。
- ・ 実習生によっては、どのように児童生徒と接するとよいのか考えながら、実践し、反省している者もいる。

【上記1・2の改善のための取り組み】

- (1) 教育実習では、お世話になっているという「感謝の気持ち」と「謙虚さ」を持つことが基本的姿勢であることを理解させる。
- (2) 各学年で「教育実習オリエンテーション」が実施されており、「教育実習ガイドブック」にも詳細に述べられているが、今の学生には「してはいけない」などの注意だけでは通じない。「なぜいけないのか」学校現場で児童生徒に直接指導に当たる1人の教師としての立場をきちんと理解させる必要がある。
- (3) 希望に胸膨らませて入学した学生の中には、「燃え尽き症候群」の姿を見せる者もいる。また、1・2年次では、教職に関する専門科目はほとんど学習しておらず、教職への意識が薄らいでいる。ただ、1年次に実施されている「教育実践基礎演習」は、学生の感想によると、この時期における意識づけには大いに効果があったように思う。また、2年次での「観察実習」は経験しているが、教員としての予備知識も課題も持たずに参加しており、単なる観察（見る・知る）や児童生徒との触れあいだけに終わっていないか。平成28年度の3年生の中には、1・2年次に社会連携科目の「教師への道」や「教師の仕事」を選択している学生がいる。この講義内容は、学校現場の指導に直結するものであり、教師として求められる実践的指導力を身につけさせるものである。これらを受講した学生は、教師への意識も高くなっている。教員を志望する学生が、「教師への道」「教師の仕事」を共に選択し受講することで、課題解決に寄与できると思う。
- (4) 1・2年次から、各自治体の「求める教師像」や、「教員採用試験実施要項」、「教員採用試験問題」（教職教養、面接、模擬授業、論作文等の過去問）を知らせることで、大学4年間の過ごし方や

心構え、教員としての資質・能力を身につける努力をするようになることが期待できる。現在、社会連携の講義の中で一部実施している。

教員採用試験 → 人物重視 → 面接重視
学校現場で教員に求められるも → 実践的指導力

- (5) 教育実習中に、担当教員から指導されると、「教員志望ではないので……」と真剣に取り組もうとしない者がいる。教育実習の意義・目的を再確認させたい。また、基本的態度として、「教員採用試験を受けますか？教員になる意志はありますか？」と聞かれたら、迷わず「はい！」と答えるようにしたいし、実習中に指摘されたことについては、謙虚な気持ちで取り組む姿勢を身につけさせたい。

3 教育実習の課題

(1) 実習期間の問題

3年次実習では、実習期間が2週間から4週間と短いため、どうしても教科指導が中心となってしまふ。それ以外の校務の実習が出来なかつたり不十分であり、教員として学校教育活動の全体像が見えないし、2年次までの予備知識も少ない中で、3年次での「教師に関する意識」の調査には無理があるのではないかと。大学として調査結果を真剣に捉える必要はないのではないかと。実態に合わせた調査項目の検討が必要。

(2) 教員志望者ではない者の実習

教員志望ではないが教員免許状を取得するためだけ、あるいは単位を稼ぐためだけに教育実習に臨む実習生が少なからず存在する。実習校にとって教育実習は、学校現場における正規の教育活動の一部を、将来教員として共に勤務することを期待し、後輩育成の機会として厚意で受け入れる側面が大きい。教員として勤務する意志のない学生が依頼することは、現場の教員に対して不謹慎と取られ、せつかくの自らの教材研究の時間等の合間を縫って指導しても後輩育成につながらない。実習公書。

しかし、近年、民間企業でも教員免許所持の応募者を求める教育産業も増え、正規の学校教員希望者のみしか実習を受け入れないという考えは時代錯誤とも言える。教員免許更新制では、教員免許が失効しても、公立学校の教員採用試験は受験できるため、教員採用試験に合格すれば、更新講習に参加可能になり、失効した教員免許を復活させ更新することが可能である。また、私立学校の教員として採用することが決定した者についても、学校の証明書を提出することにより、同様に更新講習に参加可能になり、教員免許を復活させ更新することが可能である。

今現在教員志望でなくても、将来進路変更して教職関係の職に就く可能性もあり、そのためにも教育実習を重要なものとして学生に自覚させたい。

4 3年次教育実習を終えての学生の感想： 教採対策の面接練習での学生の応えより

(1) 教育実習で一番嬉しかったことは何ですか？

- ・ 児童生徒から、「先生の授業は分かりやすかったよ」と言われたこと。
- ・ 児童生徒から、実習の終わりの日に、お礼の言葉やお手紙をいただいたり、「本当の先生になって、また教えて欲しい」と言われたこと。

ほとんどの学生が上記のように応え、実習を経験して教師になりたいとの思いが更に深まったようである。

(2) 教育実習での失敗経験はありますか？

- ・ 最初の授業で、予定通り授業が進まず、時間通りに終わらなかったこと。
- ・ 授業で、予想もしていなかった児童生徒の考えや反応に戸惑ったこと。

ほとんどの学生が、特に最初の授業で、「児童生徒の実態把握が出来ていなかったこと」や「教材研究不足」が原因であると応えている。

「3年次教育実習のあり方」
に関する報告書

平成28（2016）年3月1日

編著 熊本大学教育学部教育実習委員会